

ようきてちょーた瀬戸！

「ようきてちょーた」=瀬戸弁で「よく来てくれたねえ」の意味

作成：瀬戸市おもてなしボランティア
季刊誌作成チーム
発行：瀬戸市 まるっとミュージアム課

06 平成19年8月18日発行



磁祖

きかち

加藤民吉

とうたみ

彼の功績と現代に伝わるものとは……？

瀬戸は日本六古窯(瀬戸、備前、信楽、越前、丹波、常滑)のひとつであり、陶磁器の代名詞「せともの」と言われているように、千年余り続く陶磁器の一大産地です。しかし、その長い歴史の間、何度か存亡の危機が訪れました。

豊臣秀吉の朝鮮出兵によって九州有田地方に伝来し、17世紀初めから作られていた白く美しい「磁器」に押され、陶器中心に生産していた瀬戸は衰退の一端を辿り始めます……。

「なんとかして、有田のような磁器を作らねば……」瀬戸でも磁器を作ろうと試みますが、なかなか上手くいきません。

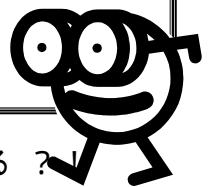
そこで、磁器製法を学ぶため、瀬戸から九州へ赴いた人物が、「加藤民吉」でした。

(一七七一〜一八四)

果たして、民吉はどうやって瀬戸のピンチを救ったのでしょうか？(2・3面へ続く)

瀬戸のヒーロー”加藤民吉”を知る！

かとう たみきち



これであなたも“民吉通”。民吉のことを知れば、せとものまち・瀬戸の歴史が見えてくる？

民吉を知る～其の～ 民吉はどうして瀬戸で磁器の神様として崇められているの？

千年余り前からやきものを作ってきた瀬戸でしたが、江戸初期から磁器を作り始めた九州に押され、やきものがあまり売れないという苦しい時代がありました。このピンチを救うべく、1804年、民吉は九州へ赴き、有田の周辺地である熊本県天草や長崎県三川内、^{みかわち}佐々で修業を重ね、^{ひぜん}肥前磁器の製造法を学びます。

3年間の修業を終え、1807年、民吉は瀬戸に戻り、九州で学んだ新たな磁器生産の技法やシステムを伝えました。これにより、瀬戸でも本格的な磁器を作ることができるようになり、後に続く磁器生産発展の礎を築きました。

江戸時代後期には、瀬戸の磁器は全国に出荷され、やきものの総称として「せともの」という言葉も使われるようになりました。明治に入ると、万国博覧会に出展されるようになり、瀬戸の磁器が高く評価され、海外輸出も盛んに行われるようになりました。

この業績に感謝し、民吉を「磁祖」と崇め、^{かがみ}窯神社に祀りました。ここで行われていた祭礼が、市をあげて行う「せともの祭」へ発展し、毎年9月第2土・日に瀬戸川沿いで行われる販売市は多くの人で賑わいます。

今年は民吉が九州から帰って、ちょうど200年という節目の年。民吉が伝えた技は、瀬戸窯業の発展になくてはならないもので、現代の陶工にも受け継がれています。



「窯神社」の社殿は登り窯(丸窯)を模している

たみきちコラム 「せともの祭に雨が降るのは、民吉が九州に残した現地妻の涙」って本当？



昭和7年から始まるせともの祭は、なぜか雨がよく降り、別名“雨祭”と言われています。この雨は「民吉が九州で磁器製法を学ぶために結婚した現地妻の涙」という伝説があります。この伝説は、

昭和2年に大阪中座で上演された歌舞伎「^{ふたおもてえにし}明暗縁染付」の話が元になっていて、歴史的事実ではないと思われま。また、「九州に残された母子が民吉に会うため瀬戸にやってきたが会うことができず、悲しみの末、雨池(元・祖母懐小学校跡)に投身した。」という話に由来する“親子地蔵”が新世紀工芸館脇に現存しますが、これを調べると矛盾する点がいくつかあり、伝説を裏付けるものではないと言えます。

民吉は産業スパイのように現地に潜入して技術を盗んだのではなく、修業先で出身や実名を述べ、学びたいことを伝えていたことが、当時の手紙や日記からも分かっています。現地妻がいたと言われる長崎県佐々町では、2年余り滞在した後、瀬戸に帰って窯業を復興させた人物として敬まわれており、今もその功績が称えられ、「民吉もなか」というお菓子が販売されているほどです。

このことから、民吉が九州で誠実に修業をしていて、現地の人にも親しまれていたのではないかと思います。

佐々銘菓
「民吉もなか」



民吉が佐々で作った「懐き柏向付」を象っている。上品な甘さの餡が美味！

民吉を知る～其の～ 民吉が伝えた技術はどのように瀬戸で活かされたの？

磁器独特の製法 やきものを作る工程は、主に「土作り」「形作り」「装飾」「窯焼」の4つに分かれますが、陶器と磁器は各工程において、原料や焼き方などそれぞれ独特の技法があります。瀬戸は古くから陶器の生産を行っており、磁器の生産にも挑戦していましたが、九州のような白くて美しい磁器はなかなか作ることができませんでした。そこで、民吉は九州でいくつかの磁器独特の製法を学びましたが、なかでも装飾の工程で使用する釉薬に“柞灰”を使用することは重要な発見でした。

“柞灰”の使用 「釉薬」はやきものの表面の色や質感、強度をつけるために使用します。民吉が九州で学んだのは、この釉薬に柞という木の灰を使うことでした。この柞灰を使用し、磁器染付に使用する青い顔料「眞須」の発色がよくなり、表面が美しくなるため、民吉は九州から瀬戸にこの苗木を持ち帰りました。しかし、柞の木は温暖な気候を好むため、



民吉出生の地にある柞の木

瀬戸ではほとんど枯れてしまい、他所から買われていました。柞灰は非常に高価だったため、他の材料と混ぜたり、代用品を発見して、後の瀬戸における染付磁器の量産を支えました。元々やきものの原料が豊富にあった瀬戸でしたが、九州の磁器生産に多く使われていた柞や陶石(磁器素地の原料)はほとんどなかったため、地元の原料を活用しながら瀬戸ならではの調合方法を生み出して、磁器を大量に作ることを可能としました。民吉を支えた人 柞灰などの磁器製法を伝えた民吉の功績はもちろんですが、民吉が九州に行く前に共に釉薬を始めとする磁器製法の研究をしていた「津金文左衛門」や、柞灰のような磁器生産に欠かせない材料の確保等、瀬戸の量産体制の仕組みを整えた「加藤唐左衛門」が民吉を支援していたことも忘れてはなりません。これらの人物の活躍により、幕末には瀬戸の磁器は九州に匹敵するものとなりました。明治以降は、その質の高さから海外にも輸出され、民吉の技は今も脈々と受け継がれています。

民吉を知る MAP

今号で紹介している民吉さんゆかりの地を訪ねてみよう！（所要時間約2時間）

民吉の生家跡地として石碑が建つ。釉薬の原料、柞の木も植わっているよ！

民吉像の側には、民吉を支えたとものの発展に尽力した津金文左衛門さんと加藤唐左衛門さんの石碑も建つよ！

瀬戸染付・伝統工芸士の技に出会える場所！

古窯や瀬戸染付に関する展示がいっぱい！次世代の民吉となるべく研修生のみんなががんばっているよ！

カクタミアート 染付春悦 陶彦神社 深川神社

マルチメディア伝承工芸館 瀬戸染付研修所

瀬戸蔵

新世紀工芸館

瀬戸市文化センター（瀬戸市美術館）

パルティセと

尾張瀬戸駅

名鉄瀬戸線

窯神社

民吉出生の地

i... 観光案内
P... 無料駐車場
P... 有料駐車場 (1時間無料、100円/時間)

民吉が伝えた技“瀬戸染付焼”の技術を見て・触れて・体験できるスポット

「^{そめつけ}染付」とは、白^{まじ}素^じ地に^{こす}呉^す須^す等の絵の具を使って絵付けをし、^{ゆうやく}釉^{やく}薬^{やく}をかけて焼いたもの。「^{したえ}下^え絵」とも言う。

伝統の技を現代に伝える場所

瀬戸市マルチメディア伝承工芸館 瀬戸染付研修所

名鉄尾張瀬戸駅から多治見方向へ20分ほど歩くと、^{にしごう}西郷町の閑静な住宅街にこの工芸館があります。



交流館の1階では、日本各地から集まった研修生が染付作品を製作しています。2階では、藍色の顔料「^{こす}呉^す須^す」を用い、水墨画のような濃淡で繊細かつ緻密な絵柄が特徴的な瀬戸染付の紹介と名品の数々が展示してあります。

輪郭を描かずに一気に描き上げる瀬戸特有の^{もっこ}没骨技法で描かれた19世紀後期の染付葡萄図の皿（展示は平成19年9月24日まで）は、磨き上げられた技に感動させられます。本館2階に展示された研修生と修了生の作品は、毎日使える器をテーマに製作され、伝統技法を引き継ぎながらも、新鮮なデザインが楽しめます。また、磁器を焼く登り窯の一種「^{こがま}古窯」も市の有形文化財として保存されており、瀬戸染付の歴史を堪能できる所です。



工芸館の外観(左)と側の屋敷にある40年前に作られた「染付の門柱」(右)。門柱には染付の皿や急須などが隙間なく埋められ、一見の価値アリ。

〔住所〕瀬戸市西郷町98 〔電話〕0561-89-6001
〔開館時間〕10時～17時 〔駐車場〕乗用車5台分有
〔休み〕火曜(祝日の場合は開館し翌日休館)、年末年始

伝統工芸士が魅せる技

カスタミアート ^{そめつけしゅんえつ}染付春悦

深川神社の裏の細い路地に入っていくと、右手に白地にコバルト色で描かれた葉や蔓が切れ目無く繋がっている絵タイルで壁一面覆われた家が見えてきます。



ここは瀬戸染付焼(加飾部門)の伝統工芸士である加藤^{かみ}美^み喜^こ子^こさんと美喜子さんが信頼し成型を任せていらっしゃるご主人^{かづたみ}一民さんのギャラリーです。磁祖民吉が伝えた「伝統の技」を今に活かし、柔らかく伸びやか



主に成型を担当する一民さん(左)と伝統工芸士の美喜子さん(右)。何百年たっても色あせることのない染付のように仲むつまじいお二人。

な筆致で自然を描く作品作りを続けています。美喜子さんは、「主人の成型技術は天下一品。ここまでの大皿の成型ができる人はこの辺りには主人しかいないのでは。」と一民さんを絶賛してみえます。根付、雛人形、干支飾り、招き猫、大皿、海外向けのランプなどがレトロな調度品と共に並べられ、ちょっと昔の雰囲気がお洒落な空間です。また、作業場では染付の体験教室も行われており、二人の指導のもと、自分だけの作品製作も可能です。ギャラリーと併せてぜひお立ち寄りください。

〔住所〕瀬戸市宮脇町28 〔電話〕0561-84-2696
〔営業〕毎日(不定休) 〔染付体験料〕2,500円～
〔備考〕体験は当日予約可、受付10時から15時まで

*この季刊誌「よっきてちよーた瀬戸!」は、瀬戸市おもてなしボランティアの季刊誌チームメンバーが、ボランティアの目線で瀬戸の観光情報取材し、作成しています。ぜひ、誌面に対するご意見・ご感想を事務局までお聞かせください。

(瀬戸市おもてなしボランティア事務局)

瀬戸市役所 まるっとミュージアム課 〒489-0813 瀬戸市蔵所町1-1
TEL: 0561-88-2541 FAX: 0561-97-1557 E-mail: marutto@city.seto.lg.jp

